

明治期・大正期・昭和戦前期におけるシャム王族の京都滞在 —どこを訪問し、何をしたのか—

圓 入 智 仁

Siamese Royalty Who Stayed in Kyoto During the Meiji, Taisho, and Pre-WWII Showa Periods: Where They Visited and What They Did

Tomohito Ennyu
(2024年12月9日受理)

1. はじめに

本稿の目的は、明治期から昭和戦前期の京都に滞在したシャム（現在のタイ、1939年6月23日までの国号は「シャム」）の王族に着目し、彼らが京都のどこを訪問し、何をしたのか、明らかにすることである。

近代における日本とシャムの外交関係に関して、石井米雄・吉川利治『日・タイ交流六〇〇年史』（講談社、1987年）や、外務省外交史料館編『特別展示「日本とタイ—国交樹立 130 年—」展示史料解説』に基づいて概略を記すと、次の通りとなる¹。

1887（明治20）年、シャムのラーマ5世チュラーロンコーン王（1853-1910、在1868-1910、以下「5世王」と表記、他の王も同様）の異母弟、テーワウォンワローバカーン外務大臣が来日し、「修好通商に関する日本国暹羅（シャム）国間の宣言」が調印された²。これにより日本とシャムの間に外交関係が樹立し、相互の外交官派遣や領事の設置が取り決められた。翌1888（明治21）年、シャムからチャオプラヤー・パッサコーラウインが来日して、その宣言の批准書を交換した。

1897（明治30）年、初代在シャム公使として稲垣満次郎がバンコクに赴任し、シャムの初代在日公使として空軍少将プラヤー・リッティロンロナチュートが着任した。翌1898（明治31）年、「日本暹羅修好通商航海条約」が調印され、両国間の通商等について定められた。その後、1900（明治33）年に5世王より仏舎利の分与があり、名古屋に日暹寺（現在は日泰寺）を建立して奉安した。さらに1924（大正13）年、「日本国暹羅国間通商航海条約」が調印された。この条約により日本人の土地所有権、鉱山権、森林伐採権、沿岸貿易権等が新たに認められ、両

国間の経済活動が活発になった。

この間、日本からシャムに法学者が派遣され、シャムの近代法典の編纂に尽力したり、同様に女性教師が派遣されてシャムの女子教育にあたったりするなど、シャムへの日本人の渡航については上記2つの書籍の他、西野順治郎『増補新版 日・タイ四百年史』（時事通信社、1984年）や朝日新聞社『写真集 友好の世紀 日・タイ交流の100年』（1987年）などが指摘している。

ところが、日本に来たシャム人に触れているものは少なく、わずかに圓入智仁「1930年前後の日本の少年団とシャムのルークスアの相互訪問」（『中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要』第48号、109-120頁、2016年）や、圓入智仁訳『日本に渡ったルークスア

1929年に訪問したシャム人の記録』（2012年、原本は *Luuksua Pai Yiipun*, 1933年）があるのみである。前者において圓入は、1929年に日本を訪れたシャムの子ども組織ルークスアに参加していた子どもや指導者が、神戸港で上陸して鉄道で東京に向かい、帰路は横浜を出港して神戸港や門司港に寄ったこと、また、その道中に訪問した場所について明らかにしている。圓入はその訪問地を工場、新聞社や電話局などの情報通信施設、百貨店などの商業施設、官公庁、暹羅協会など日本とシャムの関係機関、軍事施設、宗教施設、皇室（王室）関連施設、少年団・ルークスア関係、観光に分類し、具体的な訪問先を記している。それに対比させるため、1931年にシャムを訪問した日本の少年団の子どもと指導者による、バンコクとその近郊の訪問地も明らかにしている。この論考により、相互の招待側の思惑と、訪問側の受け止め方の違いが明らかになっている。

この論考を発展させるかたちで、本稿では明治期から

昭和戦前期に京都を訪問したシャムの王族が、京都のどこを訪問し、何をしたのか、解明する。その際、主に使用するのは当時、京都で発行されていた地元の新聞である。この新聞は現在の『京都新聞』であるが、源流は1879(明治12)年創刊の『京都商事迅報』である。後に『商事迅報』、『京都新報』、『京都滋賀新報』と改称し、1885(明治18)年5月10日から1892(明治25)年9月25日までは『中外電報』、その後、1897(明治30)年6月30日までは『日出新聞』、その翌日からは『京都日出新聞』という名称であった³。本稿では京都府立京都学・歴史館が所蔵するこれらの新聞のマイクロフィルムを閲覧し、情報を収集した。

本稿では資料を引用する際、旧字を新字に改めている。また、引用する新聞では漢字にふりがながついているが、本稿では省略する。さらに、全て引用ママである。

2. 明治期から昭和戦前期に京都を訪問したシャムの王族

ここでは、『日出新聞』や『京都日出新聞』、そして京都ホテルのホームページ、さらには国立公文書館アジア歴史資料センターで閲覧できる資料、京都府の公文書から、明治期から昭和戦前期に京都を訪問したシャムの王族についての情報を整理する。

(1) 『日出新聞』や『京都日出新聞』の記事

京都府立京都学歴史館は1885(明治18)年以降の当該新聞を所蔵しており、その記事から以下の通り、京都を訪問したシャムの王族を4人、確認できた⁴。

- ①1890(明治23)年：パーヌランシー親王
- ②1903(明治36)年：ワチラーウット王太子
- ③1915(大正4)年：カムペンベツト親王
- ④1919(大正8)年：ロップリー親王

①の人物は記事によって「暹羅国皇族ハラングセ殿下」(『日出新聞』明治23年7月22日、1頁)、「ハスラングセ親王殿下」(『日出新聞』明治23年8月6日、2頁)、「暹羅国皇族ハスラングセ親王殿下」(『日出新聞』明治23年8月7日、1頁)、「暹羅国皇族バヌラングセ殿下」(『日出新聞』明治23年8月15日、2頁)と、名前の表記が混乱している。これらに似た名前の人物「暹羅国プリンスバヌラングセ殿下」に対し、1890(明治23)年、「明治勲章ノ勲一等ニ叙シ旭日菊花大綬章ヲ贈進」することに関する公文書がある⁵。この年に日本から勲章を受けた王族は、パーヌランシー親王(Prince Bhanurangsi Savangwongse、1859-1928)のみであり、この人物と

同定して良いだろう⁶。彼はラーマ4世モンクット王(1804-1868、在1851-1868、以下「4世王」と表記)の子どもであり、当時の5世王の弟であった。タイの郵便制度の創設者であり、初の陸軍元帥でもある。

②について、新聞での表記は「暹羅国皇太子殿下」であるが、彼はワチラーウット王太子であり、後のラーマ6世ワチラーウット王(1880-1925、在1910-1925、以下「6世王」と表記)である。訪日時点では父の5世王が王位にあったため、「皇太子」という立場であった⁷。

③について、新聞紙上では「暹羅国皇弟ハンバインベシヤ殿下」(『京都日出新聞』大正4年1月28日、1頁)、「暹羅国皇弟カンバインベシア同妃両殿下」(『京都日出新聞』大正4年1月29日、3頁)、「暹羅皇弟カンベングヘム同妃両殿下」(『京都日出新聞』大正4年2月2日、3頁)、「暹羅皇弟カムベンテツト殿下並妃殿下」(『京都日出新聞』大正4年2月4日、2頁)などと記載されていた。この「皇弟」は、6世王の弟の意味である。その上で、1915(大正4)年2月10日の『京都日出新聞』2頁には、この人物が「บุรฉัตรไชยากร」と自著として書いた文字の写真が掲載されている。来日当時、この文字列を含む名前を持っていたのは、Prince Purachatra Jayakara, Prince of Kamphaengphet (1881-1936、本稿では「カムペンベツト親王」と表記)であった。彼は5世王の子どもであり、6世王の異母弟である。タイの鉄道や無線通信に大きく貢献したと評されている。

④の人物については、新聞紙上での「暹羅皇弟ログリヤコワ殿下」(『京都日出新聞』大正8年2月28日夕刊、1頁)、「暹羅国皇弟ロフポリー殿下」(『京都日出新聞』大正8年3月3日、1頁)という6世王の弟という立場から類推して、Prince Yugala Dighambara, Prince of Lopburi (1882-1932、本稿では「ロップリー親王」と表記)であると考えることができる。彼は5世王の子どもであり、6世王の異母弟である。また、後述の7世王の在位期に内務大臣を務めたことがある。

(2) 京都ホテルのホームページ

京都ホテルのホームページには、日本の皇族や諸外国の王族などの宿泊記録がある⁸。例えば、1903(明治36)年1月2日には「シャム国皇太子殿下、来館」とあり、1906年(明治39)年5月13日には「シャム皇族一行、来館」とある⁹。この件について、京都ホテルの別のページには「シャム皇族チアイシー殿下」が同年5月に京都ホテルに宿泊したとする記事がある¹⁰。この件について、当時の海軍省の記録から「暹羅国陸軍総督ナコン、チヤイシ殿下」であると考えられる¹¹。なお、彼には随員として「陸軍少将 ピヤ、ラムカンヘング」、「陸軍中佐 モム、ナレンデン」、「陸軍少佐 ルアン ダムロング」の

3名が同行していた。

彼らは横浜に入港して横須賀の軍事施設を見学する予定であり、この東京滞在中は5月3日から「帝室ノ貴賓」として芝離宮に滞在し、11日の夜に新橋駅を発して名古屋に向かうことになっていた。彼らは名古屋滞在中に岐阜に寄り、その後、奈良を経由して5月13日夜に京都に到着し、3日後の16日午前中に大阪に向かい、広島、呉、宮島に寄って下関に至る旅程であった。さらにその後は「私ノ資格ヲ以テ韓国大連及旅順ヲ一覽セラレ場合ニヨリテハ奉天迄御旅行」する予定だった¹²。ただ、彼らの京都における足跡は不詳である¹³。

さらに、京都ホテルのホームページには、1915（大正4）年2月5日に「シャム皇帝殿下、来館」とある。「皇帝」は「皇弟」の表記間違いと思われる¹⁴。上述のカムペーンベツト親王のことであろう。また、1924（大正13）年11月28日には「シャム皇帝・同妃両殿下、来館」とあるが¹⁵、この詳細は不明である¹⁶。

（3）京都府の公文書

京都府の公文書にも、シャムの王族の来訪に関するものがいくつか残っている。まず、1890（明治23）年の「暹羅国皇族バヌラングセ殿下」である¹⁷。この人物は上記①と同一である。次に1930（昭和5）年の「暹羅国皇族カンペンベツト殿下」である¹⁸。この人物は上記③カムペンベツト親王と同一人物と思われ、2度目の来日であろう。そして1931（昭和6）年の「暹羅国皇帝皇后両陛下」である¹⁹。これはラーマ7世プラチャーティボック王（1893-1941、在1925-1935、以下「7世王」と表記）と、その王妃のことである。

これらのうち、カムペンベツト親王の2度目の来日は本稿で扱うが、7世王については検討の対象としない。7世王はアメリカからの帰国途中、日本に寄港したものであり、京都の滞在時間は20時間足らずで、ホテルの他に訪問したのは「暹羅協会」主催によって「住友男爵別邸」で開催された「午餐」のみであった。

3. それぞれの京都における訪問地

以下では、明治期から昭和戦前期に京都へ来たシャムの王族が、京都のどこを訪問し、何をしたのか、具体的に解明する。

（1）パーヌランシー親王

パーヌランシー親王は1890（明治23）年7月19日、横浜港に「独逸郵船」で入港した（『日出新聞』明治23年7月23日、1頁）。その後、同年8月5日午後11時に京都に到着し、河原町二条下の常盤ホテルに入った。（『日

出新聞』明治23年8月7日、2頁）。6日は午後「東西本願寺」を訪問し、7日は「疏水線路」の巡視をかねて大津を訪問して同日中に京都に戻った。さらに8日には御所、「二條離宮」などを訪問する予定であるという（『日出新聞』明治23年8月8日、1頁）²⁰。この8日に関する記事は予定であり、実際に訪問したかどうかは不明である。

同じ記事には、「ハヌラングセ親王殿下は太く日本刀を愛でるゝよしにて京都の骨董家林新助。池田清助の両家より正宗。其他名工の作に係る刀剣類を多く買上げられたりとのこと」とある。また、8月7日のこととして「ハヌラングセ殿下は去る七日木戸式部官と共に烏丸通高辻下る飯田新七氏氏へ赴かれ御召縮緬を初めとし上布類。卓掛帯地類。越後の白紵天鵝絨友仙。刺繍品等取交ぜ数十点の織物を買上げられたり」との記事もあった（『日出新聞』明治23年8月10日、2頁）。

以上の記事では個人名として林新助、池田清助、飯田新七が登場している。林新助（1869年生）は、「数代続く京都の美術商で、のちに京都美術倶楽部取締役をつとめるなど京都美術商界の中心的役割を果たした人物である」という²¹。池田清助（1839年生）も美術商であり、1895年に「海外への輸出と同時に、京都へくる外国人相手に『美術品』を売る」、「『新古美術工芸品販売』を目的とした池田合名会社を設立」した²²。彼は1892年、京都の東山で「美術館」の建設に着手しており、完成後の「美術館」は外国人の顧客を意識した、「一種のショールーム」であったという。また、飯田新七は京都の高島屋の経営者であり、4代目の飯田新七が1889（明治22）年3月から10月まで欧米を視察していることから²³、記事に登場する「飯田新七」は4代目飯田新七（1859-1944）あると考えられる。

パーヌランシー親王は京都滞在中、「京都織物会社へ赴き各工場を巡覧遊ばされ給ひ痛く工場の整頓し居るを賞賛し給ひ種々の見本を一覧の上色入紋羽二重及び金紋紗金襴地又は『ハンカケーフ』地等数十品代価千五百円許りのものを御買上げ相成り尚ほ帰国の上は我王室の織物調進用達方を同社に命ずべしと仰せられた」という（『日出新聞』明治23年8月14日、1頁）。

「京都織物会社」は、その50年史によると、渋沢栄一、大倉喜八郎らが発起人となって1887（明治20）年5月5日に創立された²⁴。直前の2月には「京都染物会社」と「京都撚糸会社」が創立されていたが、これらを合併する形で京都府庁から「創立の認許」を受けた。2ヶ月後に「仮営業」を始め、1890（明治23）年4月に「吉田下阿達の本社建築工成り、新工場諸般の設備亦整頓」した。「洋式織物」の工場である。その直後に皇后が訪問したほか²⁵、創業から50年の間に20人を超す皇族と、朝鮮王族が工場

を訪れている。

50周年史に収録されている「創立趣意書」の「京都織物会社組織要項」によると、その「営業目的」は、「純然タル西式ノ機械及製法ヲ用ヒ、汽力ト人力トノ兩種ニ頼リテ純絹織物及絹綿交織物ヲ製スル」ことにあった。さらに生産する品物としては、「汽力」に頼るものとして和洋服用の裏地、縐子地、傘地、厚甲斐地、琥珀地、婦人衣裳地、童女衣裳地、首巻地、羽二重等地、リボン地、その他の織物、人力に頼るものとして家具装飾物、衣裳用各種紋織を挙げていた。

これまで引用してきた新聞記事からは、パーヌランシー親王が京都で東西本願寺や疏水、御所や二条離宮を訪れると同時に、かなり買い物をしている姿が浮かび上がる。しかも、京都織物会社に「織物調達用達」を命じるほど、その製品を気に入ったのであろう。なお、パーヌランシー親王が京都織物会社を訪問したのは、本社や工場が本格稼働した直後のことであった。

その後、パーヌランシー親王は8月9日に奈良、その翌日夕方に大阪へ向かい、神戸港から出港して帰国の途に就いた²⁶。

3年後の1893（明治26）年、「久しく暹羅国に在りて同国文部大臣の値遇を受け」た²⁷、「高知県の岩本千綱氏」が「同国王室の御用を帯び我国の織物陶器及び教育品等買入の爲め帰朝し」、神戸と大阪を経て京都に至り、「飯田新七、錦光山宗兵衛、川島甚兵衛並に織物会社等へ赴き織物陶器類を一覧し」た。岩本は一旦、東京に向かったが、近日中に「再び來京し諸買入物等を果たし暹羅国へ出立する筈」であるという（『日出新聞』明治26年3月28日、1頁）。この時点で岩本に京都での「買入」を指示できるのは、日本から、いわゆる「お雇い外国人」としてタイに渡った人物の他に、「修好通商に関する日本国暹羅（シャム）国間の宣言」関連で来日したテーク・ウォン・ワロー・バカーン外務大臣、チャオプラヤー・パス・サコーラウィン、そしてパーヌランシー親王など、タイからの来日経験者が考えられる²⁸。

錦光山宗兵衛は、京都栗田焼の窯元である²⁹。錦光山家は徳川将軍家ともかわりがあったが、明治維新後は海外への輸出も手がけていた。1890年前後は7代目の錦光山宗兵衛（1868-1927）が活躍した時期であり、彼は京都の製陶業の振興に貢献したという。また、川島甚兵衛は織物業を営んでいた³⁰。1890年前後は2代目の川島甚兵衛（1853-1910）の時期であり、彼は西陣織を室内装飾物に改良した人物として知られている。

（2）ワチラーウット王太子

1903（明治36）年1月2日午後4時22分、ワチラーウット王太子は京都駅に到着し、京都ホテルに入った（『京

都日出新聞』明治36年1月3日、1頁）。ワチラーウット王太子は1898年からのイギリス留学からの帰国の途中で、アメリカと日本を経由した。

以下で記す翌3日と4日の行動は、『京都日出新聞』明治36年1月5日の1頁と2頁の記事による。1月3日は午前中、東山にある天台宗の寺院、妙法院を訪れた。ここには、「曾て暹羅国帝王より仏骨と共に給はりし金像釈尊の模型を安置」していた。その後、三十三間堂に立ち寄り、京都ホテルに戻った。午後は西本願寺と東本願寺を訪問し、ホテルに戻る途中に「堺町通四〇（判読不能）角なる人形商大木平三氏方へ立寄せられ奥座敷陳列の種種の人形を一々御覧あらせられたるが彼の武人の大将人形杯は余程目を止めさせられ丈二尺余の娘人形二個（代価百余円）を御買上あり尚ほ他にも種種御注文に成りし品もあり」とのことであった。

この人形商は「大木平蔵」であろう。大木平蔵は江戸時代から続く「丸平大木人形店」の当主の名跡であり、「丸平」の雛人形は1890年の第3回内国勸業博覧会や、開催年は不詳だがパリ万博で受賞したことがある³¹。

夜は「新京極の日本手品師上村を旅館に呼寄せ釵吞玉子吞其他の日本固有の手品を御覧あらせられし」という。

1月4日は午前中、京都御所、二条離宮を訪問してホテルに戻り、午後は高島屋の「飯田新七氏方へ赴かせられ」、殿下の一行は直ちに二階の陳列場に至らせられ刺繍屏風及額面等を限なく御覧あらせられ夫れより階下の陳列場を御覧に成り御手づから御好の品を御撰択あらせられ窓掛刺繍屏風額面ハンカチーフ外数点の御買上あり、休憩の後、「同店裏手なる刺繍工場を御巡覧」した。次いで「西村総左衛門氏方」を訪問し、「同所奥の陳列場に於て御休憩の上刺繍屏風並に壁掛け等を御覧あらせられ屏風二点壁掛二点御買上」して京都ホテルに戻った。この西村総左衛門（1855-1935）は染色家であり、織物商の12代当主であった。友禅染の振興に寄与した人物である³²。

1月5日は日帰りで奈良に向かって神社仏閣を巡り、古物などを購入した（『京都日出新聞』明治36年1月6日、1頁）。夕食後は新京極の歌舞伎座で狂言を鑑賞している（『京都日出新聞』明治36年1月7日、1頁）。

1月6日は午前中、「新門前小堀西入池田清助氏方」を訪問し、「同家美術館階下の陳列品中金地の書棚牙彫類刀剣類貴金属等を入念に御覧あり夫れより楼上にて一時間余も各美術品を御覧あらせられしが彫刻物杯は余程御目高き御様子にて象牙彫刻の都踊の人形彫踊子三人囃四人（踊子二人なりしを一人増さしめられたり）を蒔絵の台付の儘御買上げあらせられ尚ほ赤銅の巻煙草立二個を御注文あらせられ御滞在中調製出来ざる旨を申し上げられしに本国へ送付方を命ぜられ」た。

その後、弁天合資会社で「陳列場の縫屏風其他の貿易品を御覧」になったが、先日訪問した飯田氏方や西村氏方で見た品と、ほぼ同様であったので、「一二点は御選定相成しも御買上の有無は未定」だった。さらに円山公園の知恩院を訪れ、「也阿弥ホテル」で昼食をとった後、徒歩で円山公園を散策し、八阪神社を訪問した。続いて「清風與平氏方」に到着して「楼上階下に陳列の陶磁器等を御覧」になった。さらに清水寺に行く予定であったが、雨のため見合わせてホテルに戻った（『京都日出新聞』明治36年1月7日、1頁）。

なお、弁天合資会社は1898（明治31）年に、京都の貿易商、刺繍業者、骨董品店、ガイドなど外国人相手の業者の一部が京都ホテルや「也阿弥楼」の出資を受けて設立した会社であり、外国人観光客に日本の土産品を斡旋していた³³。また、清風與平（1851-1914）は陶芸家の3代目であり、陶芸界初の帝室技芸員となって近代の京焼の発展に重要な役割を果たした人物である³⁴。

1月7日は午前中、「並河靖之氏錦光山宗兵衛氏方へ成らせられ夫れより枳穀邸に赴かせられ」て、「大谷派本願寺」で昼食をとり、午後は「京都織物会社」を訪問する予定だった（『京都日出新聞』明治36年1月7日、1頁）。しかし、翌日の記事（『京都日出新聞』明治36年1月8日、1頁）によると「早朝以来寒風強く殊に降雪」などがあり、「雪景を三階なる御寢室」で見た。その後、「枳穀邸」を訪問して昼食をとった。これは東本願寺の庭園である涉成園の通称「枳穀邸」のことであろう³⁵。

その後、午後は「三條古川町の並河靖之氏方」を訪問して、「陳列の七宝類等を御覧の上裏手の工場へ成らせられ七宝製造」の様子を見た。「花瓶其他等二品許り御選定あらせられしが御買上に成るや否やは未定の趣き尚ほ純銀台の○（判読不能）さ二十銭銀貨位のメタル（表殿下御紋章仏像釵鉾日光を鋳○（判読不能））に入る裏菊模様）を十二個御注文あらせられ」た。この並河靖之（1845-1927）は日本を代表する七宝家であり、帝室技芸員にも任命された人物である³⁶。

さらに「錦光山宗兵衛氏の陳列場」を訪れ、「楼上陳列の陶器を隈なく御覧ありて殿下自ら種々の陶器を御選定あらせられたるが舞妓及芸妓の人形台附大花瓶二対菊模様の一輪活其他二十点（五六百円）御買上と為り尚随行の人々も多くの買上を為し」たという。

そして京都市水利事務所を訪問し、その発電場に入って「発電機の運転を親しく御覧ありて種々の御下問」があった。「殿下には電気事業の事柄に就ては余程御承知の御様子にて加藤技師長は疏水より水を引きたる為め大津飲料水給与の事二千ボルトの電線を架設する事等に就て説明を申し上げしに殿下にも最と御満足にて同事業を当地に於いて起したる事等に付ては大に御賞賛あらせら

れ」た。その後、平安神宮を移動中に見て京都ホテルに帰館した。なお、「京都織物会社」への訪問は取りやめた（『京都日出新聞』明治36年1月8日、1頁）。ホテルでは「祇園新地芸舞妓の舞踏を御覧」になった（『京都日出新聞』明治36年1月9日、2頁）。

1月8日は午前中に「京都綿子株式会社」と「川島工場」を訪問し、午後に「扇子商会」に向かう予定であった（『京都日出新聞』明治36年1月8日、1頁）。実際には、この日、午前中は外出せずに「多数の伺候者に拝謁を許され」、昼食後に「京都綿子会社」を訪問した。その休憩所に「陳列ありし綿ネル各標本等を御一覽あらせられ」て、「機の仕立場より梭の製造等を委しく同巡覧綿ネルの絲に糊する器械室及織工場等を御覧の上原動器室に入らせられ器械の運転を丁寧に御覧ありて捺線器械室に入らせられ」た。続いて、徒歩で「田圃道」を「京都紡績会社」に行き、「綿繰器室より製糸器並に仕上場等隈なく御巡覧あらせられ」た。

さらに「京都扇子商会」を訪問し、「同所陳列の各扇子を御覧あらせられ殿下御手づから御好の扇子数十本を御撰択ありて買上げさせられ夫れより家族制度に成れる同商会の社宅分業工場を御巡覧あらせられしが殿下には該業務は器械上の事業にあらずして悉く手芸を以て調製を為すに実に御満足に思召されたる趣きにて悉く御巡覧を畢らせ」た。続けて「田中利七氏方」を訪問する予定であったが、扇子商会で時間を多く過ごしたため、見合わせるようになった（『京都日出新聞』明治36年1月9日、1頁）。また、この日に予定していた「川島工場」の「御巡覧」も、見合わせた（『京都日出新聞』明治36年1月9日、2頁）。

なお、「京都綿子株式会社」は、毛織物の一種であるフランネルに類似する、表面を起毛させた加工綿布である綿ネル（綿フランネル）について、紡績から織布、染色、起毛の工程の一貫生産を実現した会社である³⁷。また、「川島工場」は、川島甚兵衛による川島織物所のことと思われる。西陣織を生産し、輸出を手がけており、模様織物、綴錦、刺繍を製造していた。「京都紡績会社」と「京都扇子商会」の詳細は不明である。田中利七は、刺繍を製作すると共に、その貿易商を営んでいた³⁹。

ホテルに戻ってからは、「東洞院蛸薬師角の菓子司若狭屋を召させられ御前に於て干菓子の草花及造物の菓子製造の技を行はしめ親しく御覧あらせられ」た（『京都日出新聞』明治36年1月9日、2頁）。

1月9日は日帰りで大阪に出向いた（『京都日出新聞』明治36年1月10日、1頁）。

1月10日は午前中に市立盲啞院を訪問した。「盲生の体操啞生の発音盲生の読書、算術等の各教室を御巡覧の上階上に登らせられ啞生揮毫の色紙短冊扇子等を二個

づ、御選定御覧相成り夫より〇〇（判読不能）裁縫等の各教室を経て盲生音曲室に入らせられ諸種の音曲を聞召されしが殊に唾生の発音、絵画盲生の読書等に御目を止めさせられ盲啞教育の必要なるを感じさせられしやう拝し奉れり」という。この後、ホテルに戻り、午後、京都駅から神戸に向かった（『京都日出新聞』明治36年1月11日、1頁）。

1月11日朝、神戸から急行列車で下関に向かい（『京都日出新聞』明治36年1月12日、1頁）、1月15日に長崎を出港して帰国の途に就くことになっていた（『京都日出新聞』明治36年1月15日、1頁）。

（3）カムペーンペット親王（1回目）

1915（大正4）年1月27日、カムペーンペット親王は「モンゴリヤ号」で横浜に入港した（『京都日出新聞』大正4年1月28日、1頁）。その後、東京に滞在して2月3日夕方、名古屋から京都駅に到着し、京都ホテルに入った（『京都日出新聞』大正4年2月4日、2頁）。

カムペーンペット親王の来日は「世界御漫遊」の一環であり、1913年11月にシャムを出てインド、エジプトを経て1914年8月中旬にイギリスのロンドンに入り、そのまま滞在する予定であったが、「欧洲戦乱勃発」のため、予定を変更してアメリカに渡り、ニューヨークを経て来日した。「全く純然たる観光の御目的なれば日本漫遊を了られたる後は上海を経て御帰国」の予定であるという（『京都日出新聞』大正4年2月4日、2頁）。

2月4日は雨天のために午前中はホテルで静養し、午後は「林、山中両貿易店」を巡覧した（『京都日出新聞』大正4年2月5日、2頁）。前者は美術商の林新助の店と考えて良いだろう。後者は「山中商会」であると思われる。本店を大阪に置き、京都市上京区寺町通御池下ルに支店を持っていた。ニューヨークやボストン、ロンドンにも支店を持つ美術商であった⁴⁰。

2月5日は「高島屋呉服店」を訪れて「刺繍の屏風額面等に特に御注目あり一巡の後ち絹張り雪洞、天鵝絨製の額面及び舞子が太鼓を叩き笛を吹く鼓を打ち居る京人形等の御買上げあり」という。その後、東本願寺を訪問し、さらに武徳殿で「柔剣道」の「地稽古」を観覧した。続いて「錦光山宗兵衛氏方」で工場を見学して輸出向け陶器に関する説明を受け、知恩院を訪れて参拝し、ホテルに戻った（『京都日出新聞』大正4年2月6日、2頁）。

2月6日は午前中に「桃山両御陵」を参拝した（『京都日出新聞』大正4年2月7日、2頁）。明治天皇と昭憲皇太后の陵である。ホテルに戻って昼食をとった後、カメラを持って東山に出向き、「円山公園、清水、智恩院等各所の風景を御撮影」した。

2月7日は午前中、「三條烏丸西村總左衛門方」に出

向き、「陳列室并に刺繍工場等御巡覧」した後、「御思召に叶へる刺繍及び天鵝絨製の山水額面数点」を購入した。その後、桂離宮から嵐山に向かい、「風光を御賞賛」した。滞在中のホテルに戻って昼食をとった後、大丸呉服店に向かった。ここでは新設の茶室を訪れ、次いで「荻田氏の飛行機」を見て質問し、さらに開催中の「大村恕三郎氏のヴァイオリン会」で「千鳥の曲」を聞いた。大丸呉服店では「西陣織丸帯数点」を購入し、金閣寺に移動した。夕方、「東堀川一條上る川島織物所」を訪問して「綴の錦工場、刺繍工場、参考館」を見て回った（『京都日出新聞』大正4年2月8日、3頁）。

2月8日、午前中に盲啞院を訪問した。「啞生製作の屏風、盲生授業用の点字標本等を御覧あり」、「各教室に於ける授業を御巡覧相成りたるが先づ体操室に於ける盲生の体操授業を御覧あり、続いて普通科盲生教室において可憐なる男女生が教師の読み上ぐる文章を与へられたる点字器によりて指頭の働きも敏活に忽ちにして、点字板に印刻し了り、更に之を指先きにて擦りながら『日本の国は花の国、梅、桃、桜、藤、菖蒲、白露結ぶ秋の野の』……などの名文章を声高らかに読み上ぐるなどの授業振りを御覧じて御感斜ならず、更に音曲練習室にて男女の盲生が胡弓、琴、三絃の三曲合奏 節面白く『茶音頭』の曲を練習し居るにぞ、殿下には暫し其の妙なる音に聴き惚れ」たようである。さらに「啞生の製作に係る絵画、木工器具等を御覧」になり、「運動場における啞生等が教室の手先きにて示す号令一下、規律整然として一糸乱れず、自由自在に団体運動をなせる態を御覧」じたことで、「可憐なる不具者を斯くまでに教育するは随分の骨折りなるべし授業の模様は非常の参考になりたり」との讃辞を賜ったようである。この訪問を終えて奈良に向かった（『京都日出新聞』大正4年2月9日、2頁）。その途中で、伏見稲荷に立ち寄っている（『京都日出新聞』大正4年2月9日、7頁）。

2月8日の夕方から10日まで奈良に滞在し（『京都日出新聞』大正4年2月10日、2頁）、10日の夕方に大阪に到着した（『京都日出新聞』大正4年2月11日、3頁）。その後は市内の工場等を見学し（『京都日出新聞』大正4年2月12日、2頁）、2月14日の夜に神戸に向かう予定であるという（『京都日出新聞』大正4年2月11日、3頁）。

（4）ロップリー親王

1919（大正8）年2月27日、ロップリー親王は「御宿痾の肺患御静養」のため「郵船丹後丸」で来日し、神戸に入港した。その日のうちに京都に来て、都ホテルに入った（『京都日出新聞』大正8年2月28日夕刊、1頁）。日本滞在中は公式行事がなく、非公式のものだった（『京

都日出新聞』大正8年3月1日、1頁)。

3月1日、『疏水二條上る西村象彦店』を訪問した(『京都日出新聞』大正8年3月2日夕刊、1頁)。この西村象彦店は、塗りや蒔絵の京漆器を製作しており、ロブリー親王が訪問した頃は8世西村彦兵衛が当主であった。1918(大正7)年に「象彦漆器陳列所」を開設しており、多くの皇族や海外の貴賓を迎えたようである⁴¹。

その後、3月2日午前に東京に到着している(『京都日出新聞』大正8年3月3日、1頁)。

(5) カムペーンベツト親王(2回目)⁴²

1930(昭和5)年11月21日の夜、カムペーンベツト親王は京都駅に到着し、都ホテルに24日まで投宿した。京都府としては当初、以下の通り7日間にわたる滞在中の予定を検討していた。

- | | |
|-----|-----------------------------------|
| 第一日 | 御所、桃山御陵、宇治平等院、松殿山荘茶道会、黄檗山万福寺 |
| 第二日 | 錦光山陶器店、象彦漆器店、島津製作所、川島織物工場、日本レース工場 |
| 第三日 | 愛宕山、高尾、茶会(楽焼) |
| 第四日 | 修学院、四明ヶ嶽、三井寺、石山寺 |
| 第五日 | 保津川下り、嵯峨嵐山、天龍寺、日活スタジオ、桂離宮 |
| 第六日 | 知恩院、八坂神社、清水寺、博物館、陶磁器試験場、二條離宮 |
| 第七日 | 大丸、高島屋、西村刺繍店、林骨董店、自由時間 |

後に京都滞在の日程が11月21日から23日までであることが判明し、しかも初日は午後7時57分着、23日は朝、大阪に向かうことになった。ただ、直前に24日まで京都滞在を延長することになったため、「視察箇所」は「修学院、太秦撮影所」とした。実際には、22日午前中に「大丸、高島屋、並河人形店」などを訪れて「御土産品」を購入し、午後は三條白川橋稲葉七穂堂に立ち寄った後に、「太秦の日活撮影所」を訪問して見学している。また、23日は午前中、嵐山で紅葉を鑑賞し、午後は「山科のゴルフリンクス」で夕方までゴルフをした。

「三條白川橋稲葉七穂堂」の稲葉七穂(1876-1953)は、七宝作家である。三条大橋東の一帯には、多くの七宝工房があり、主に輸出を見据えた作品が製作されていたという⁴³。「山科のゴルフリンクス」は1925(大正14)年に開場した「京都カントリー倶楽部山科ゴルフ場」と思われるが、現存しておらず、詳細は不明である。

4. 訪問先の分類

タイの王族の京都での訪問先は、仏教寺院を含めた観光、娯楽、工場や技術の見学、百貨店や骨董品店、工芸品の直売店、そして盲啞院に大別できる。これらの訪問地をどのように決めていたのか、新聞の記事や公文書は伝えていない。もっとも、本稿で検討した時期にシャムの王族が京都の詳しい情報を持っていたことは想像できない。そのため、受け入れた日本側が、1930(昭和5)年のカムペーンベツト親王の2回目の京都滞在時のように、訪問地を策定していたと思われる。

(1) 仏教寺院を含めた観光

東西の本願寺、京都御所、二條離宮(二条城)はパーヌランシー親王、ワチラーウット王太子、カムペーンベツト親王(1回目、西本願寺以外)が訪問したか、訪問の予定であった。他に東山の円山公園、知恩院、清水寺をワチラーウット王太子やカムペーンベツト親王(1回目)が訪問したか、訪問の予定であった。カムペーンベツト親王は2回の京都滞在でそれぞれ嵐山を訪問しており、その場を気に入ったのであろう。

ワチラーウット王太子は他にも妙法院、三十三間堂、カムペーンベツト親王(1回目)は桃山御陵、桂離宮、金閣寺、伏見稲荷を訪問した。カムペーンベツト親王(2回目)は桂離宮も訪問を予定していた。

(2) 娯楽

ワチラーウット王太子は歌舞伎座を訪れたほか、宿泊したホテルに手品師を呼んで「日本固有の手品」を見た。さらに舞妓を呼んで「舞踏」を見たり、干菓子職人を呼んで製造の様子を見たりした。カムペーンベツト親王(2回目)は、太秦の撮影所やゴルフ場を訪問した。

ただ見るだけの京都滞在から、体験を含む滞在になっている。特にゴルフについては日本側の当初の予定にも入っておらず、カムペーンベツト親王の希望があった可能性がある。

(3) 工場や技術の見学

パーヌランシー親王は疏水と京都織物会社を見学した。ワチラーウット王太子は京都市水利事務所、「京都綿子会社」、「京都紡績会社」、「京都扇子会社」を訪問し、京都織物会社の見学も予定していた。いずれにおいても近代的な技術に基づく工場生産に取り組んでいた。また、ワチラーウット王太子は案内人も驚く知識を示していた。日本とシャムは共に、欧米列強からの植民地支配を受けていないアジアの国家であり、近代化を推し進めた明治天皇と5世王の即位は、ほぼ同時期であった。

ワチラーウット王太子など来日したシャムの王族は、日本の技術力を目の当たりにしたと思われる。

さらに、ワチラーウット王太子は「川島工場」(川島織物所のことか)の訪問を予定しており、カムペンベツ親王は「川島織物所」を訪問して、綴の錦工場、刺繍工場を見学した。他にもワチラーウット王太子は並河靖之の七宝の工場や「京都扇子商会」の「社宅分業工場」を見学し、カムペンベツ親王は「錦光山宗兵衛」の陶器工場や、「西村總左衛門」の刺繍工場を見学した。他にも、工芸品店を訪問した際、その工場を見学していた可能性もある。

(4) 百貨店や骨董品店、工芸品の直売店

本項で検討したシャムの王族達は、実によく物品を購入していた。具体的に読み取れた金額では、パーヌランシー親王が京都織物会社で1500円、ワチラーウット王太子が人形商大木平三の店で100円、そして錦光山宗兵衛の店で陶器に500～600円を支払ったようである。他にも高島屋(飯田新七)、大丸、弁天合資会社、さらにはいずれも美術商の林新助や池田清助、山中貿易店(山中商会のことか)でも品定めをしたり、実際に購入したりしている。また前項でも触れた工場併設の「陳列所」などで、その製品を購入していた。

その購入品は刀剣、縮緬、西陣織、刺繍、人形、屏風、ハンカチ、陶磁器、七宝、扇子など、多種多様であった。また、近代的な工場での生産物も購入していた。

なお、パーヌランシー親王の訪日(1890年)当時、京都市内の「内地白米」1石の値段は、9.25円であった。1石は約1,000合、約60キログラムに相当する。現在の米の価格を10キログラム6,000円とすると、60キログラムは36,000円であり、1石9.25円と比べて約3,900倍である。この数値をパーヌランシー親王が支払った1,500円にあてはめると、約580万円となる⁴⁵。

5. まとめ

本稿で検討の対象としたのは、シャムの王太子を含む王族であり、かなりの金額を使用できる立場にある大人であった。冒頭で紹介した圓入による先行研究では、検討対象は来日した子どもの組織であり、大人の引率者がいたとは言え、本稿で登場した王族のように散財できる立場ではなかった。

子どもたちも日本の各地を訪問したが、ほとんど全てが予定通りであった。ところが、本稿で検討した王族達は、予定をかなり変更していた。脚注26で触れたとおり、パーヌランシー親王は夜中に外出して関係者を心配させた。ワチラーウット王太子は雨のため清水寺の訪問を止

めたり、雪景色を見るため午前中の訪問を止めたり変更したりした。あるいは訪問した工場で多くの時間を割いたため、「川島工場」の見学を中止した。彼らは王族であるため、受け入れて訪問先を手配した日本側の接待係としては、彼らの要求を受け入れるしかなかったのであろう。つまり、本稿に登場した王族たちは予定された訪問地に行くかどうか、自ら判断することができたのである。

なお、ワチラーウット王太子が1903年に、またカムペンベツ親王(1回目)が1915年に、それぞれ「盲啞院」を訪問していることは興味深い。当時、シャムで障害児教育がどの程度実践されていたのか詳らかではないが、6世王時代の1921年に義務教育制度が発足したことを考えると、ほとんど整備されていなかったと考えられる。タイでの障害児教育の起源を考える上で、彼らの盲啞院訪問は重要な意味を持つ可能性がある。

1895(明治28)年11月中の外国人来客数として、京都市内の「也阿弥楼・中村楼・京都ホテル」を合わせて180人に及んだ46。パーヌランシー親王が京都を訪問したのは、その5年前の1890(明治23)年であった。

1901(明治34)年の京都の外国人観光客は約4,000名にぼり、1903(明治36)年4月の「京都宿泊外国人は1,549名、107万円余りの経済効果」だったという⁴⁷。ワチラーウット王太子が京都を訪問したのは1902(明治36)年であり、ちょうどこの時期に当たる。

1911(明治44)年になると「京都駅の乗降外国人は約1万5,000名。前年に対して5,800名の増加」であり、1920(大正9)年には「入洛外国人客、8,292名(数年来の最高記録)」であった⁴⁸。カムペンベツ親王の1回目の京都訪問は1915(大正4)年であり、ロップリー親王は1919(大正8)年であった。この頃、年間に1万人前後の外国人が京都を訪問していたと思われる。

カムペンベツ親王が2回目に京都を訪問した1930(昭和5)年は、その2年前に昭和天皇即位の礼があり、その「御大典参列の外国貴賓入洛」があり、「英国大使他14ヶ国大公使」が京都ホテルに来館した⁴⁹。即位の礼の翌年、即ちカムペンベツ親王が京都に来る前年の1929(昭和4)年は「御大典式場跡拝観のための旅行客増加の影響によりホテル好況を博す」一方で、「ニューヨーク株式大暴落。世界恐慌の始まり」という時期だった。外国人観光客が急増した数十年の経過の後の、不景気の始まりである。1931(昭和6)年の満洲事変勃発、翌年に続く世界的不況や「満州や内蒙古の時局の緊張」で外国人観光客が減少した後、1934(昭和9)年と、その翌年は円安で外国人客が増加した⁵⁰。

本稿に続いて、タイの公文書館などで王族達の日本訪問に関する記録を探索し、彼らの感想など訪日記録の内容を検討したい。彼らが当時の日本をどのように見て、

理解したのか、また、シャムのその後の発展にどのように訪日経験を活かそうとしていたのかを解明できると考えている。

注

- 1 外務省「特別展示 日本とタイ ―国交樹立130年―」〈<https://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000272254.pdf>〉、2024年9月9日アクセス。
- 2 彼の日本国内での行動に関する記録は少なく、横須賀の造船所を見学したことなどが判明しているのみである（「明治21年1月24日 本館滞留の暹羅国大使バスカラウオングス閣下当地滞在中横須賀造船所並に軍艦一覽致度旨申件」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C10124281700、明治21年 公文雑輯 巻2 儀制（防衛省防衛研究所））。
- 3 京都新聞「沿革」〈<https://www.kyoto-np.co.jp/list/corporate/history>〉2024年8月30日アクセス。その後、1942（昭和17）年に『京都日出新聞』と『京都日日新聞』が合併して、現在の『京都新聞』になった。
- 4 1901（明治35）年に京都に来た「東京駐在暹羅国公使ヒヤー、ワイアイ、ロング、ロンナチエツト氏」も確認できるが、情報が少なく、本稿では検討しない。なお、この人物は上述の初代在日シャム公使のプレイヤー・リッティロンロナチエートと考えて間違いないだろう。
- 5 「暹羅皇族へ贈進セラル、勲記書式ヲ定ム」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.A15111960900、公文類聚・第十四編・明治二十三年・第十二巻・儀制・朝儀・礼式・服制・徽章・音楽・族爵・種族・勲等（国立公文書館）。
- 6 名前に含まれる"Bhanurangsi"の音を、「バヌラングセ」や「ハラングセ」、「ハスラングセ」、「ハヌラングセ」などと表記したと思われる。
- 7 正確を期すならば、「王太子」と表記するべきであろう。本稿では新聞の表記に合わせることにする。
- 8 ここで上げた人物の他にも、1901（明治34）年7月29日には「シャム国公使来京、本願寺差し回しの馬車にて同本山に至り両法主と面会、いとまごいの挨拶後、京都ホテルにて午餐」とある。これは初代在日シャム公使のプレイヤー・リッティロンロナチエートであると考えられる（京都ホテル「写真・年表に見る京都ホテル100年の歩み 1901（明治34）年—1910（明治43）年」〈https://www.kyotohotel.co.jp/history/chapter_06/chapter_06_75/〉2024年9月13日アクセス）。
- 9 京都ホテル「写真・年表に見る京都ホテル100年の歩み 1901（明治34）年—1910（明治43）年」〈前出〉2024年9月13日アクセス。
- 10 京都ホテル「30. 貴顕のご宿泊」〈https://www.kyotohotel.co.jp/history/chapter_02/chapter_02_30/〉2024年9月13日アクセス。
- 11 「伊国並暹羅国皇族来朝及博恭王殿下清朝訪問（2）」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C06091723300、明治39年 公文備考 巻7 儀制5止（防衛省防衛研究所）、34画像目。
- 12 「暹国皇族芝離宮へ滞在の件（2）」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C04014309600、壹大日記 乾 明治40年12月（防衛省防衛研究所）。
- 13 辻岡健志「宮内省の外賓接待と大津事件 ―宮内省公文書類の生成・編纂を中心に―」（宮内庁書陵部『書陵部紀要』66号、40-60頁、2014年）によると、この年、「シャム皇族ナコンチアイシ」が来日して、京都を含む日本各地を訪問していたようである。この論文の「表1 外賓接待中地方遊覧先・鴨場接待一覽」には、1887（明治20）年の「シャム皇族デヴワウオングセ」が来日して「関西（大阪・京都）」を訪問したある。これは5世王の異母弟の異母弟、テーワウォンワローバカーン外務大臣と思われる。他にも1890（明治23）年の「シャム皇族バタラングセ」や、1902（明治35）年の「シャム皇太子マハ・ワジラウツド親王」の記述がある。
また、一行が東京滞在中の5月7日、「ピヤ、ラムカムヘング」に勲二等旭日章、「モム、ナレンデン」に勲三等瑞宝章、「ルアン、ダムロング」に勲四等旭日章を叙勲することに関する書類が作成された（「暹羅国陸軍少将ピヤ、ラムカムヘング外二名叙勲ノ件」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.A10112613400、叙勲裁可書・明治三十九年・叙勲巻一・内国人・叙勲・削除・申牒（国立公文書館））。「ナコンチアイシー殿下」は、既に勲一等に叙されていたようである。
- 14 京都ホテル「写真・年表に見る京都ホテル100年の歩み 1911（明治44）年—1920（大正9）年」〈https://www.kyotohotel.co.jp/history/chapter_06/chapter_06_76/〉2024年9月13日アクセス。
- 15 京都ホテル「写真・年表に見る京都ホテル100年の歩み 1921（大正10）年—1930（昭和5）年」〈https://www.kyotohotel.co.jp/history/chapter_06/chapter_06_77/〉2024年9月13日アクセス。
- 16 当時、王位にあった6世王はこの年に来日していない。
- 17 京都府立京都学・歴史館の資料（簿冊番号：明23-0002、簿冊名：番外達、作成課：知事官房、年度：〔明

- 治23年度]、件名番号：081、件名：シャム国皇族入京の件、年月日：明治23.7.26、西暦：18900726、差出人／作成者：宮内大臣、宛先：知事、内容：宮内省外■課往88号、データ ID：0000163265)。
- 18 京都府立京都学・歴彩館の資料(簿冊番号：昭05-0017、簿冊名：暹羅国皇族カンペンベツ殿下入洛一件、作成完結年次(年号)：昭和05年度、作成課：秘書課、形態：簿冊、頁数：1、閲覧方法：原資料、内容：昭和5年11月21日—24日シャム国皇兄殿下の御入洛に関する記録並びに入洛中の日程等の事前打合文書などの綴、重要文化財指定：有、文書区分：京都府庁永年文書、データ ID：0000048481)。
 - 19 京都府立京都学・歴彩館の資料(簿冊番号：昭06-0018、簿冊名：暹羅国皇帝皇后両陛下入洛一件、作成完結年次(年号)：昭和06年度、作成課：秘書課、形態：簿冊、頁数：1、閲覧方法：原資料、内容：昭和6年シャム国皇帝皇后両陛下、米国からの帰途来日、入洛に関する日程、献上品並びに送迎、御下賜金等の文書の綴、重要文化財指定：有、文書区分：京都府庁永年文書、データ ID：0000048717)。
 - 20 「二条離宮」は、二条城のことである。
 - 21 山本真紗子「美術商山中商会 ―海外進出以前の活動をめぐって―」立命館大学大学院先端総合学術研究科『Core Ethics：コア・エシックス』第4号、2008年、371-382頁。
 - 22 山本真紗子「明治京都における官製『美術』概念の受容 ―京都の博覧会と美術商・美術館』をめぐって―」立命館大学大学院先端総合学術研究科『Core Ethics：コア・エシックス』第5号、2009年、393-402頁。
 - 23 高島屋「高島屋の歴史」〈<https://www.takashimaya.co.jp/shiryokan/history/>〉2024年9月13日アクセス。
 - 24 京都織物株式会社『京都織物株式会社五十年史』1937年。この会社に関する以下の記述も、特に明示していない限りはこの社史に基づく。
 - 25 「皇后」は明治天皇の皇后春子のことである。
 - 26 パースランシー親王は、京都到着後早々に周囲を心配させる事件を起こしていた。新聞は以下の通り伝えている。「ハヌラングセ殿下は一昨日午後十一時京都に着し河原町二条下る常盤『ホテル』に投宿せられたるが夜中市中を散歩せんとて出て行かれしまゝ待てどもく帰宿せられざりしにぞ常盤にては大に心配し居りしが散歩の途次俄かに洛東圓山也阿弥楼に投宿せられ同楼にても深更の事とて大周章に周章たへつゝ、同殿下を宿らせ参らせたりとのこと同殿下は昨日休息の爲め旅館に在りて何地へも出遊せられざりしよし」(『京都新聞』明治23年8月7日、2頁)。
 - 27 岩本千綱は明治期の早い段階からシャムに渡り、「探検」をしていたようである。詳しくは、吉田千之輔「日タイ交流史の余白(第11回) 岩本千綱の『暹羅国探検実記』を読む(第1回)」(日本タイ協会『タイ国情報』第44巻第3号、2010年、188-193頁)や、村嶋英治「バンコクの日本人(15) 日本人タイ研究者第一号 岩本千綱(1)」(タイ国日本人会『クルンテープ』525号、2011年、10-13頁)の連続ものの文章などを参照のこと。
 - 28 この他にも、来日経験のあるシャムの王族や政府関係者がいたかもしれない。
 - 29 錦光山和雄『京都栗田焼窯元 錦光山宗兵衛伝』開拓社、2018年。
 - 30 辻本憲志「二代川島甚兵衛と室内装飾織物」日本繊維製品消費科学会『繊維製品消費科学』第62巻第4号、2021年、234-237頁。
 - 31 銀座呂藝「大木平蔵(丸平)」〈https://rogei.tokyo/artist_data/%e5%a4%a7%e6%9c%a8%e5%b9%b3%e8%94%b5%ef%bc%88%e4%b8%b8%e5%b9%b3%ef%bc%89/〉2024年9月14日アクセス。
 - 32 中川麻子「『美術染織』概念の成立経緯」『デザイン学研究』第58巻第6号、51-60頁、2012年。小田桃子「京都美術協会発行の雑誌に見る12代西村總左衛門の活動」千總文化研究所『千總文化研究所年報』第4号、28-31頁、2021年。小田桃子「12代西村總左衛門の略歴」千總文化研究所『千總文化研究所年報』第5号、28-47頁、2022年。
 - 33 京都ホテル「第二部 明治編 ～順風満帆～ 明治27年～明治44年 25. 弁天合資会社」〈https://www.kyotohotel.co.jp/history/chapter_02/chapter_02_25/〉2024年9月14日アクセス。
 - 34 京都陶磁器会館「第六回 京焼と皇室技芸員―三代清風與平―」〈<http://kyototoujikaikan.or.jp/column/2020/06/30/4771/>〉2024年9月14日アクセス。
 - 35 真宗大谷派「各施設のご案内 渉成園」〈<https://www.higashihonganji.or.jp/about/guide/shoseien/>〉2024年9月14日アクセス。
 - 36 並河靖之七宝記念館「並河靖之七宝記念館について」〈<https://namikawa-kyoto.jp/introduction.html>〉2024年9月14日アクセス。
 - 37 亀井大樹「日本の工業化初期における繊維企業の統合政策：京都綿子ル社を事例に」同志社大学人文科学研究所『社会科学』49号、2019年、57-82頁。
 - 38 著者不明「川島織物所」『機械学会誌』16巻29号、1912年、149-154頁。
 - 39 立命館大学アート・リサーチセンター「京繡」

- 〈<https://artsandculture.google.com/story/KwVRCgV-ihndKQ?hl=ja>〉2024年9月14日アクセス。
- 40 山本真紗子「美術商山中商会 ―海外進出以前の活動をめぐって―」(前出)。
- 41 京漆匠象彦「象彦の歴史」〈<https://www.zohiko.co.jp/about/>〉2024年9月14日アクセス。
- 42 京都府立京都学・歴彩館の資料(簿冊番号:昭05-0017、簿冊名:暹羅国皇族カンペンベツ殿下入洛一件、データID:0000048481、前出)。
- 43 立命館大学アート・リサーチセンター「京七宝」〈<https://artsandculture.google.com/story/vAUxNgkVghxwLw?hl=ja>〉2024年9月14日アクセス。
- 44 京都府『京都府統計史料集 ―百年の統計―』第4巻、1970年、31頁。
- 45 ワチラーウット王太子が訪日した1903(明治36)年の「内地白米」の金額は不明だが、「内地玄米」の「中」の価格は把握できる。1890(明治23)年の物価などを勘案して1円の価値を計算すると、現在より約2180倍となる。当時の100円は現在の貨幣価値で約21万8000円となり、500円は約109万円となる。
- 46 京都ホテル「写真・年表に見る京都ホテル100年の歩み 1888(明治21)年―1900(明治33)年」〈https://www.kyotohotel.co.jp/history/chapter_06/chapter_06_74/〉2024年9月16日アクセス。
- 47 京都ホテル「写真・年表に見る京都ホテル100年の歩み 1901(明治34)年―1910(明治43)年」(前出)、2024年9月16日アクセス。1903(明治36)年の貨幣価値から、当時の107万円は現在の約23億3200万円に相当する。
- 48 京都ホテル「写真・年表に見る京都ホテル100年の歩み 1911(明治44)年―1920(大正9)年」(前出)、2024年9月16日アクセス。
- 49 京都ホテル「写真・年表に見る京都ホテル100年の歩み 1921(大正10)年―1930(昭和5)年」(前出)、2024年9月16日アクセス。
- 50 現代日本が観光立国を目指し、外国人旅行者によるインバウンドが増加した後に発生したコロナ禍の影響を受けた観光業の打撃、さらには円安による外国人観光客数の増加を彷彿とさせる歴史的な経過である。